

古井由吉と「家ならざるもの」

日居月諸

一 家ならざるもの

フロイトは一九一九年に発表した論文「不気味なもの」において、美学研究が「美しく偉大で魅力的な、つまり肯定的な種類の感情やそれが生まれる条件、それを起こす事象の方」を好んで取り上げるばかりで、嫌悪の元となる不快な感情は取り上げないとし、それを埋め合わせるために不気味なものに対する分析を展開している。論文では二つの方面からの研究が為され、一方はホフマンの小説「砂男」を中心とした個々の事例の蒐集、もう一方はドイツ語の「unheimliche」という単語の分析に費やされている。

不気味という感情は同じ事態の反復、特に抑圧したものの回帰によって引き起こされる、とフロイトは述べている。ホフマンの「砂男」において主人公ナタニエルは幼少期に味わった眼球を失うことへの不安を成長と共に乗り越えたかに思われたが、そうして抑圧したものはあらゆる場面で回帰し続け、彼を狂気に陥れた末に自死にまで至らしめる。抑圧したものが回帰するたびに主人公を襲った感情こそ不気

味という感情なのであり、読者が同様の感情を覚えるのもまた彼の防衛機制の果たした役割を理解しているからこそだとするのだ。

論文の梗概を確かめたところで、フロイトが「unheimliche」の語義分析をしている部分に注目しよう。

ドイツ語の「unheimliche」という単語は、明らかに、「heimlich」¹ heimisch（我が家の）、vertraut（馴染みの）」の反対語である。従ってそこから当然予想されるのは、何かあるものが驚愕させるのは、まさに知られておらず馴染みがないからこそだという結論である。だが当然ながら、新しく馴染みのないものすべてが驚愕させるわけではない。この関係を逆にすることはできない。新手のものは容易に驚愕させ不気味なものになる、と言えるにすぎない。新手のものの中には驚愕させるものがあるが、すべてがそうであるわけではない。新しいもの・馴染みのない、それを不気味なものにする何かさらに付け加わらねばならないのである。¹

フロイトはこの問題を解決するために「unheimliche」の使用例の蒐集へと向かう。そこでシェリングなどがこの単語を両義的に使っていること、つまり秘密しておくべきだったものが明らかになった時、もまた unheimliche なのだ、という意味で使っていることを確認し、

¹ 「不気味なもの」『フロイト全集』第十七巻、藤野寛訳、岩波書店、五頁

先程見たようなホフマンの分析へとつなげていく。

ところで、引用において「heimliche」とは「我が家の」という意味の単語であると説明されている。それに否定の接頭辞「un-」をつけた「unheimliche」とは、直訳すれば「家ならざるもの」とすることが出来るだろう。そこで一つの疑念が湧き起こってくる。先程確かめたように、不気味という感情は馴染みの薄い新奇なものに接した時だけに起こるのではなく、秘密に出来るような馴染みの深かったものが回帰してくる時にも起こるのであった。ならば、我々にとつて親密なものである「家」を揺るがしてくる「家ならざるもの」もまた、「家」の外部にあるものに尽きるのではなく、実は「家」が抑圧しているものにも見いだせるのではないか。

「砂男」の主人公ナタニエルは幼少の頃、家にやってきた砂男コッペリウスによつて眼球を奪われかけたが、居合わせた父の懇願によつて窮地を免れた。しばらくして、父は再びやってきたコッペリウスによつて殺されてしまう。いかなる事情によつて父が殺されたか明らかにはならないが、彼の懇願によつてナタニエルが救われたという事実は確かであり、少年が無事成長しようと記憶に基づく強迫観念からは逃れられないだろう——父の犠牲によつて自分の眼球は守られた……。そうした強迫観念にひざまずくようにして、ナタニエルは死の際にあつても眼球への執着を示すこととなる。彼は塔から飛び降りながら、「そうだ、美しい目玉。美しい目玉だ」と叫ぶのだ。

このナタニエルのように、「家」もまた自らの基盤を根こそぎ奪つ

てしまうような「家ならざるもの」を抑圧しながら存立しているのではないだろうか。もしくは、それを抑圧し忘却することによって自らの基盤を盤石にしたような「家ならざるもの」の回帰に怯えることはないだろうか。

この疑問は、坂口安吾が「日本文化私観」で提示した家についての考察とも論点を同じくする。

僕はもう、この十年来、たいがい一人で住んでいる。東京のあの街や、この街にも一人で住み、京都でも、茨城の取手という小さな町でも、小田原でも、一人で住んでいた。ところが、家というもの（部屋でもいいが）たった一人で住んでいても、いつも悔いがつきまとう。

暫く家をあげ、外で酒を飲んだり女に戯れたり、時には、ただ何もない旅先から帰つて来たりする。すると、必ず、悔いがある。叱る母もいないし、怒る女房も子供もない。隣の人に挨拶することすら、いらぬ生活なのである。それでいて、家へ帰る、という時には、いつも変な悲しさと、うしろめたさから逃げるこゝが出来ない。帰る途中、友達の所へ寄る。そこでは、一向に、悲しさを、うしろめたさを、ないのである。そうして、平々凡々と四五人の友達の所をわたり歩き、家へ戻る。すると、やっぱり、悲しさを、うしろめたさが生れてくる。

「帰る」ということは、不思議な魔物だ。「帰ら」なければ、悔

いも悲しさもないのである。「帰る」以上、女房も子供も、母もな
くとも、どうしても、悔いと悲しさから逃げる事が出来ないのだ。
帰るといふことの中には、必ず、ふりかえる魔物がいる。

この悔いや悲しさから逃れるためには、要するに、帰らなければ
いいのである。そうして、いつも、前進すればいい。ナポレオンは
常に前進し、ロシヤまで、退却したことがなかった。けれども、彼
程の大天才でも、家を逃げる事が出来ない筈だ。そうして、家が
ある以上は、必ず帰らなければならぬ。そうして、帰る以上は、や
っぱり僕と同じような不思議な悔いと悲しさから逃げる事が出
来ない筈だ、と僕は考えているのである。だが、あの大天才達は、
僕とは別の鋼鉄だろうか。いや、別の鋼鉄だから尚更……と、僕は
考えているのだ。そうして、孤独の部屋で蒼ざめた鋼鉄人の物思い
に就て考える。

叱る母もなく、怒る女房もないけれども、家へ帰ると、叱られ
てしまう。人は孤独で、誰に気がねのいらぬ生活の中でも、決し
て自由ではないのである。そうして、文学は、こういう所から生れ
てくるのだ、と僕は思っている。

本稿は「家」の問題と対峙し続けた作家古井由吉の作品を通して、
この「家ならざるもの」がいかなる形態をもつて現れるか明らかにし

ていく。

二 家事を見つめるもの

耳慣れない男の声で電話が掛かってきたかと思うと、部屋にこもり
きりでいる妹に用があるとのことだった。いつもなら扉を開けるたび
姉を姉と思わないように睨みつけてくるのに、電話の主の名前を告げ
ると妹はすんなりと部屋から出てくる。出不精な叔母が珍しく顔を見
せたとあって子供達は柱の蔭から会話を盗み聞こうとするが、本人の
ためにもひそやかにやり取りを交わした方が良さだろうと、幼い声を
たしなめて遠くで電話が終わるのを待った。しばらくすると、部屋へ
と続く階段を昇っていく足音が、軽やかに聞こえてきた。

そんなやりとりが数回繰り返され、妹も部屋から出るのを渋ること
があったとはいえ、男に気を許しているのは確からしい。昨夜の電話
を察するに今日は家に招いたのだろう、と女は準備を整え客が来るの
を待ち構えていた。妹の許へと連れていく前に、話しておきたいこと
があった。妹は精神を患っているために、病院に送らなければならな
い。普段からいみ合っている姉によって無理に押し込められたので
は、入院したところで医者の手間を増やしてしまう。ならば、普段か
ら気を許している男の言葉によって送りこんでしまう方が、いくらか
穏便なのだ……男は抵抗を示してきたが、それでも最後には本人のた

めになる方を選んでくれるだろうと、妹の部屋へと連れていくことにした。

ややあって、女は様子を見に行くために紅茶とショートケーキを携えていったが、最早習慣と化した妹の険しい目つきはともかく、男からも怪訝な眼差しを向けられることとなる。

その時、階段から杏子の姉の上がつてくる足音がした。彼は杏子から顔を離そうとした。すると杏子は逆に顔を近づけてきて、唇を触れながら目を大きく見開いて足音に耳を傾けていた。それから彼女は唇を彼の耳もとにまわして、「あの人のすることを、細かく見ててちょうだい」とささやき、顔を引いてもとの頬杖にもどった。(……) テーブルのそばまで来て彼と杏子の間に立つと、杏子の姉はまっすぐに伸ばした軀をそのままそろそろと前へ傾けて、盆を杏子の近いほうの角に近づけた。そして盆の左端とテーブルの間に手をあてがい、一瞬息をこらす目つきをして左端から台布巾をすうつと抜き取り、紅茶の表面に波も立てずに盆をテーブルの角にきっちり置いた。それから彼女は二つ折りにした台布巾をつかんで右腕をいっばいに伸ばし、テーブルを遠いほうの端から木目にそって拭きはじめた。腕の力をかけられて細い手首がきゅうつとしない、細かく顫えながら左から右へじりじり動いた。そうして右端まで丁寧にむらなく拭き取ると、台布巾を左端へもどして手前にすこしずらし、同じことを三度くりかえして四度目に台布巾を裏にかえし、動こう

ともしない妹の肘を険しい目でちらりと見やった。そして妹の陣取っているところを四角く拭き残してまた四度目に台布巾を折りかえし、もう三度でテーブルを手前の端まで拭ききった。それからおまけにもう一度台布巾を裏に返すと、盆を右へずらしてその跡も丁寧に拭き取り、ようやく顔を上げて、台布巾を片手に、まだ引こうとしない妹の肘を横目で未練そうに眺めやった。杏子がテーブルのそばに立つ彼にむかって目の隅で笑った。

それから杏子の姉は紅茶のカップとケーキの皿をひとつひとつ両手に取って、一心不乱に釣合いを取りながら二人の前に整然と並べた。並べ終わると彼女はテーブルから顔を遠く離して全体を見わたし、杏子のカップに手をかけてちよつと左へずらし、それから顔を起してしばらく物も言わずに首をかしげていたが、また手を出しかけた手をひっこめて、顔をすこし紅潮させてテーブルから一歩退き、またにこやかな顔になった。

「きたならしい恰好でお相手、ごめんなさいね。病気見舞いだと思つてちょうだい。それじゃ、ごゆっくり」。

引用の通り「彼」の三人称で語りつくされる「杏子」の視点設定を、試みに杏子の姉へと変えてみたのは、何も彼女の心情を付度しようとしたわけではない。たとえば電話が掛かってくるたびこの姉は何の躊

躊もなく妹のもとへとその旨を伝えに行くし、「彼」が家へとやってきた時もまた初対面にもかかわらず妹の病状をよどみなく述べ立ててみせる。不気味なまでに一挙一動をこなしてしまふ姉は、「杏子」にあつてただ行動だけを示す存在として描かれているのだから、心情など付度したところで徒勞に終わるだろう。

注目を促したいのは、彼女が彼から見つめられながら、引用したような整然としたテーブルコーディネートを行つたという点である。引用した箇所の後で、杏子は姉の普段の様子を「彼」に教えることとなる。

「見てなくたって、わかるのよ。いつだって、何もかも、おんなじなんですもの。学校のお友達がたまに遊びに来る時も、あたしの御飯をここに運んでくる時も、いまあなたが見たのと同じことが、そつくりくりかえされるのよ。花をいじるのも同じ。あの花はあたしの領土への、あの人の橋頭堡なのよ。それとも架橋かな、病気の姉妹の……」⁵

見ていなくてもわかる、と言つてはいるものの、こうして姉の普段の様子を言葉に出来るからには、杏子は目を使わずとも意識の上では
「ちなみに姉のテーブルコーディネートを、杏子は見ていない。彼女は姉が部屋に入ってきた時に睨みつけただけで、テーブルの支度を續けている間は「ずっと、壁のほうへ視線を預けたままでいた」。

⁵ 「杏子」九二頁

常々観察しているのだと言つていい。そして、これみよがしに花を部屋に置いているという事実を踏まえれば、姉もまた実際に見られておらずとも杏子の視線を意識しているのは確かだろう。

なぜここまでお互いに執拗に視線を意識し合わなければいけないのか、といった推測はひとまず措こう。今ここで確実に言えるのは、「杏子」をひもといた際に、似たような文章が多く見受けられるということ。つまり誰かが「家」にまつわる行動に取りかかる時、彼女/彼女は他の誰かの視線を浴びている、という事実なのである。

たとえば何度目かの電話をかけたが、杏子が部屋から出るのを拒んだために、姉が引き続き通話を担うという箇所がある。姉は男に対して近頃変調を来している妹の普段の様子を訊ねつつ、こちらからも現状を簡単に話していく。後々妹を病院に送る手助けをしてくれないかと頼むことを鑑みれば、(やや冷淡な見方にはなるが)この場面は妹の片づけという「家事」を執り行うきつかけだと言えるだろう。そして、二人の通話は杏子に見られている。

「ああ、あんなところに立ってる。怖い顔でこっちを睨んでいる」と杏子の姉がかすれ声でつぶやいた。それから、
「ヨウコ、何してるの。Sさんからお電話よ。いつもいつもお待たせして申し訳ないでしょう」と成熟した女の艶のある声が響いた。それと同時に扉がバタン、と閉ざされる音が聞えた。しばらくして、杏子の姉の声がなれなれしく話しかけてきた。

「Sさん、ごめんなさいね。私がお話しているのを見て、部屋の中へ入ってしまったんです。強情な子で困りますわ。もう一度お電話くださらない。今度は私は出ないようにしてますから……」。

更に例を重ねよう。「彼」と杏子が軀を交えるための部屋へと向かう時には、このような叙述が為される。

はたから見れば、なるほど、軀のつながりが出来たばかりで、人中でもその恍惚の余韻に浸っている若い男女どうしのように見えるかもしれない。そう思いやつて彼は無然とした。ところが二人の姿をちらりと見やつては通り過ぎて行く人間たちの皮肉な目つきを見ているうちに、同じ目つきの繰返しに暗示をかけられるのか、彼は段々に自分たちが彼らの目に映るとおりのものになってしまつてもかまわないような、そのつもりになれば今すぐにもなれるような気がしてきて、彼の腕にひたすら重みをあずけている無表情な軀に情欲を感じはじめた。⁹

下卑た見方をすれば、男女の交わりこそ「家」を作るきっかけだろう。こうした事態を意識しているのは男だけではない。視線と声という違いこそあれ、杏子もまた第三者を意識しながら「家」にまつわる

睦み合いを為しているのだ。

「あそこはもうやめて、別なところにして。だって、あちこちから声が……。なんだか、二人だけのことじゃないみたいなんですもの」⁸

また、こうした例は主要人物が取る行動に限った話ではない。杏子からの誘いで長距離電車に乗って遠方へと向かう時、「彼」は乗り合わせた中年の男の様子に目をとめる。

そのうちに、隣の男がときどき週刊誌から目を上げて、杏子のうつむけた額から、小さくつぼめた胸にそって腰のあたりを眺めまわしているのに、彼は気がついた。杏子の姿のしおらしさを賞玩して、あの娘は処女だろうか、などと思いやつている目つきだった。男はやがて軽く掻き立てられた情欲のなごりを運んで、電車を降りて自分の暮しにもどっていくだろう。そのなごりが無意識のうちに周囲の人間たちにたいする、たとえば家族にたいする優しさとなって現われるかもしれない。寢床に入つて明かりを消すとき、杏子の姿がふつと浮ぶかもしれない……。⁶

⁹ 「杏子」 八〇頁

⁷ 「杏子」 四九頁

⁸ 「杏子」 五一頁

⁶ 「杏子」 七〇頁

誰かが「家」にまつわる行動に取りかかる時、彼／彼女は他の誰かの視線を浴びている。先程掲げておいた命題めいた一節の確かさが認められたところで、更に付け加えておこう。このような場面が現れる時、それは必ずと言っていいほど小説の進展を呼び寄せるといふ事実もまた確かめられるのだ。

一度目の引用、姉が部屋に入ってきてテーブルコーディネートを行った後、杏子は「彼」とのやりとりを通じて病院に行くことを決心し、小説は緩やかな終結を迎える。

二度目の引用、姉の言葉にしたがって「彼」は改めて深夜に電話をかけたものの、杏子の聞かん気は治る様子を見せない。しびれを切らして「いますぐ君のところへ行こうか」と提案したところ、「明日、おいで。三時頃」と応え、小説が終結するためのきっかけが作られる。

三度目の引用、他人を気にして部屋を変えるが、元々通じ合うところの薄かった二人の交わりはなおも深まりはせず、睦言において子供が嫌いだと言いつ杏子に対して、「彼」は漠然と感じていた隔絶が確かなものと認める。

四度目の引用、海に着いた二人は軀を交える時のようなやりとりを重ねるだけで、その場面が小説の進展に寄与することはないのだが、帰り道で杏子は自宅の番号を覚えてくれ、電話の場面へとつながっていく。

無論、小説の進展のきっかけとなる出来事が、右で示したものと類似した場面で尽きているわけではない。また同時に、「家」にまつわ

る行動が全て誰かの視線を感じながら為されているわけではない。しかし、これだけは断言できる。「杏子」において、誰かが他人の視線を感じながら「家」にまつわる行動をする時、小説は必ずと言っていいほど進展を迎えることとなる。

それは一体どういった原理に基づいて為される作家の気配りなのか。それに対する答えを用意するのは、「杏子」以外の古井作品において事情はどうなっているか、という疑問を明らかにしてからでも遅くないだろう。なぜなら「杏子」以降の作品群は、「家」の問題と向かい合っているものが多くを占めているからだ。

二 妻隠りを妨げるもの

つまごも

まずは「杏子」と併録されている「妻隠」を見ていこう。つまごみ

熱に浮かされて会社を早退し、以後数日を家に籠りきりで過ごした寿夫は、軀の感覚を取り戻すために外にある共同の流し場に出たところ、老婆と出会う。老婆は宗教じみた会合の勧誘にやってきたようで、元から目を付けている少年の所在をたずねるついでに、寿夫にも自らの信条を懇々と説きはじめた。寿夫は寿夫で、妻帯者であるにもかかわらず、なぜか独身者の心地で話に聞き入っている。

「あんたたちだって、いつまでもそんな浮ついた暮しをしてられるわけじゃないでしょうが。じきに飽きが来るわよ。もう来てるのよ。だからこそ、あんなすきんだお酒の呑みかたするんだわよ。自分の心の奥をじいっと見つめてごらん。ああ、誰かにすがりつきたいって願ってるのが自分でもわかるから。それを勘違いして、悪い女に狂ったりしてさ。あんたが心がけさえ改めれば、いいお嫁さん、ちゃあんと世話してあげるわよ。心のきれいな娘さんがいっぱいわたしたちの集まりに来てるのよ。老いも若きもちとけて、そりやあ和やかなものよ。三日に一度、夕飯の後に集まって、円くなって……」¹⁰

宗教じみた集まりへの勧誘という夾雑物さえ除けば、老婆心から来る独身者の家庭の世話と言える場面だろう。そしてここでもまた、二人の会話を見つめている者がいる。寿夫の妻である礼子が、部屋から共同の流し場を見つめているのだ。

「あなた、どこかのお婆さんに、なんだかしきりに勧誘されてたわね」¹¹

ではこの場面は小説の進展を後押しするのか。引用の前に述べた通り、寿夫は伏せりきった状態から回復して翌日からの勤めに備えようとしている。同時に、彼が外へ出れば老婆という闖入者が待ち構えており、奇妙な会話をきっかけに妻との暮らしを見つめ直すという「妻隠」の物語が展開されていくことになるのだから、進展といっても差支えないだろう。

そもそも、何故寿夫が老婆の相手をする気になったのかと言えば、病に伏せている最中に、「夫婦が日々に顔を合わせ、目を見かわしているということが、彼には急に理解できなくなった」からだ。病を通して独身者の雰囲気をもとうようになった姿を見て、老婆もそれに応じた話を持ち出したし、寿夫もまた心当たりがないわけではなかったから聞き入ってしまった。

夫婦という関係性の把握にほころびをもたらしたのは、高熱だけではない。妻が家事をする姿を見つめるという行為を通して、夫は認識不全を来すのである。

木曜の夕方、彼はまた病み上がりの惰眠からとると目覚めかけていた。すると西日の薄く射す玄関口のカーテンを軀で押し分けて、洗濯物を両腕に抱えた礼子が入ってきた。彼の視線を胸のあたりに勝手につきまとわせて、彼女は大股の歩みで彼のほうに近づいてきて、寢床のそばに坐って洗濯物をたたみはじめた。まだ陽のおいのする白い肌着を、彼女は一枚一枚ていねいに皺をのばしてた

¹⁰ 「妻隠」『古井由吉自撰作品』第一巻、河出書房新社、一〇六一—一〇七頁
¹¹ 「妻隠」一〇七頁

たみ、たたんだところから傍の箆筒の下から二番目の抽斗の中に蔵めていった。洗濯物から抽斗へ、抽斗から洗濯物へ、すこしの遊びもなく移される妻の視線の動きを、彼は引きこまれるような気持ちで追っていた。肌着を蔵めるたびに、彼女は畳の上に坐りこんだ軀を腰のところから斜めに押し上げるようにして抽斗の中をのぞきこみ、蔵まり具合を確認している。その醒めた目は日々には繰り返されることを、惰性からではなくて日々にはあらためて確認しているようだった。やがて礼子は肌着を蔵めおえると、正坐の姿勢のまま箆筒のほうへすこしいざり寄り、抽斗の中をもう一度端から端まで目をとおして、それからピシリと中に押しこんだ。その時、寿夫はふいに露悪的な気持ちになったものだった。《その肌着はどうせいましがたまで表の物干しで、よその家の洗濯物に混って、風に踊っていたばかりじゃないか》と彼は奔放に身をくねらせて風に翻っている肌着を、ことさらにどぎつく目に浮べてみた。ところが、いかにも奔放なものとして彼の目に映ってきたのは、窓の外で舞うシャツやスリッパの類いではなくて、窓の内側で静かに坐っている主婦という存在のほうだった。

あの時、彼は妻のそばに寝そべっていないながら、窓の外から他人の家庭の気配をそつとうかがう独り者の男の気持ちになっていた。¹²

この場面は後の、会社を早退して部屋で倒れている寿夫の姿を、見

も知らない男が寝ているものと思った、という礼子の告白へとつながっていく。どうか認識を取り戻し、夫を病院にやらねばならないと気が逸る妻を、ヒロシという近くの寮に住む若い職人が見ていた。

「ヒロシ君はあなたのために、お医者さんのところに飛んで行ってくれたのよ」

(……)

「ええ。あなたが口もきけない様子なので、もうびっくりしてしまつておもてに走り出たら、ヒロシ君がまだ畑のへりに立っていて、あたしの顔をまっすぐに見るの。まるであたしが出てきて用事を言いつけるのを待つてみたいに」¹³

この場面はさらなる告白へとつながっていく。冒頭に出てきた老婆のことを知らないように振舞っていた礼子が、実は例のごとく未亡人と見做されて声を掛けられていたと明かすのだ。そして寿夫は「嫉妬に似た感情に駆られて問い詰める口調」になる。あたかもその光景を再現して見せてほしいというかのように。しかし、済んでしまったものを見ることは出来ないために、展開が明確に進むことはない。

確認しよう。「杏子」においては、誰かが他人の視線を感じながら「家」にまつわる行動をする時、小説は必ずと言っていいほど進展を迎えるのだった。この命題めいた一節は更新される。古井作品におい

ては、誰かが他人の視線を感じながら「家」にまつわる行動をする時、小説は必ずと言っていいほど進展を迎える、という具合に。

もう一步踏み込んで言えば、前述したような場面は「家」の補強、もしくは「家」の破綻を呼び寄せるものとして機能していることが、「妻隠」を通して明らかになる。どうということか。順に見ていこう。

初めに寿夫と老婆が共同の流し場で話しこんでいる箇所について。これに関しては、一度独身者の心地に陥った寿夫が、妻から見られていたと知ることと夫婦の関係につなぎとめられる場面と見て差支えない。

次に礼子が洗濯物をしまう仕草を見つめる箇所について。ここは「家」の補強と破綻の両局が覗いている場面と言える。寿夫は執拗な描写を通して礼子を自分の妻であると認識し、自分共々夫婦の関係につなぎとめようとするが、それは失敗に終わるのだ。むしろこの程度で二人が破局を迎えるということはないが、予兆が訪れていることは違くない。

最後に病院の手配をヒロシに任せる箇所について。ここは多少入り組んでおり、単純に言えばヒロシのおかげで家庭は何事もなく病の治療が出来たと言えるのだが、他の二つの場面に比べ他人によって「家」の補強が為されている、という違いがある。それまでこの夫婦は二人での暮らしに自足するばかりで、老婆のような他人には夫の存在は独身と間違われるほど認識されていなかったし、病に際しても他人の世話を拒むような節さえ見せている。

「あれは、いつたい、何だったのよ。お医者さんが来た時の、もつともらしい挨拶は。いきなり蒲団の上に起きなおって。いろいろご迷惑をおかけしました。すっかり眠りこんでしましまして。そこまご配慮していただかなくても、自分で起き上がれましたのに……
だつて」

「そんな事、言ったのか」

「言いましたわよ。どういふつもり。あとは女房にやらせますから……
……だとか」

「ああ、あれか……」とあの時の事を思い出して、彼は笑い出してしまった。四十度の熱にかされていても、第三者をなるべく巻きこむまい、第三者からなるべく自由でありたいと、まだ小心に取繕っている。取繕ったつもりでいる。ところがその間、ヒロシが見ている、病院に飛んで行ってくれる、桃を贈ってくれる。裏も表もあけすけだった。¹⁴

一度目の引用でも礼子は他人が夫を余所に誘ったことに対して「痲性な拒絶の目」を浮かべており、夫婦は他人に容喙されることを極度に厭っている。これまでも何一つ問題なく過ごして来られたのだし、いまさら他人に口を挟まれる必要などない。二人の関係の邪魔になるだけだから。仮に他人の手を借りることがあるとすれば、それこそど

ちらかが居なくなった時だろう……礼子はアパートの近くに立ちつくしているヒロシを見て、こんな回想をしている。

「わたしの郷里でね、どこかの家で不幸があると、近所の子供たちがよくあんな風にその家の前に立って、出入りする人たちをじっと見まもっていることがあるの……」¹⁵

ゆえに、ヒロシに見られていたことは、実はそれまで二人が保ってきた「家」の形態の破綻につながっていたのである。さらに老婆の存在を鑑みれば「妻隠」とは、他人の目から離れることによって平穏を保っていた夫婦が、他人から目をつけられることによって破綻の予兆に揺れる筋立てと言えるし、夫婦の視線までもがそれに煽られて他人を見つめるものになってしまう小説なのである。そして、そうした他人の目こそが一章で示したような「家ならざるもの」なのである。夫婦は「家」の外にあるものを抑圧して「家」を打ち立てたが、共に独身であった頃には、外部にあるものは馴染みのあるものだったはずなのだ。

誰かが他人の視線を感じながら「家」にまつわる行動をする時、家は補強されるか、あるいは破綻の予兆（家ならざるもの）が現れる。「杏子」においてこの点はどうなっているか。姉が電話をしている姿を杏子が睨みつけている場面を例に取ってみよう。以前はここについ

て、単純に妹の片づけという「家事」、つまり「家」の補強が執り行われるのだと論じておいた。しかし、今や杏子が睨んでいることは「家事」を破綻させようとしている抵抗なのだと気付く。事実杏子が睨んだことで姉とのやりとりは打ち切られ、改めて通話を交わしながら主人公の「彼」は杏子から心を離すことなく彼女の家に招かれる。

そして、「家ならざるもの」の視点を介せば、杏子の目とは姉が抑圧したものに他ならないと断言できる。そもそも姉は杏子と同じように精神を患っていた。自分の納得の行く道の感覚がなければ歩いてもいけない、家での立ち居振る舞いさえまともに出来ない、自分の部屋にこもりきりになる、風呂にも入らない……それがいざ治ってみれば、かつての自分と同じような状態にある杏子を嫌悪しはじめる。

「姉さんは健康になったのだろう。今では一家の主婦で、二児の母親じゃないか」

「それが厭なの。昔のことをすっかり忘れてしまって、それで私の病気を気味悪そうに見るのよ」¹⁶

すっかり忘れることなど出来るはずはない。忘れようと努めているにすぎない。無意識ながらにやっていることにせよ、それこそが抑圧に他ならないのだ。抑圧したものを見つめられる時、姉は「気味悪そうに見」返すし、「怖い顔でこつちを睨んでいる」と言い返す。昔の

自分を思い出させるから、思い出してしまえばやっとの思いで打ちたてた「家」を破綻させてしまいかねないから。

フロイトは「不気味なもの」において、ドッペルゲンガーは元々「死後における生の継続を保証する」ために作られたものだと言っている。これをエディプスコンプレックスに代表される精神的去勢を重視する精神分析の文脈に照らせば、自らの象徴を親によって切り離された時の保証の手段だと言えるだろう。分身は作りだしておいた、だから去勢されたところであつての自分が無くなるわけではない……分身は自己批判的な審級として自我と対峙するものとなり、その中には去勢の際に切り捨てたあらゆるものが詰め込まれる。

ドッペルゲンガーの表象は、必ずしも、この原初的なナルシズムが没落していくのに合わせて共に没落するとは限らない。というのも、それは自我のその後の発達段階から新たな内容を獲得できるからである。自我の中にゆつくりと別の審級が形成されるのであり、それは自我の残余の部分と対峙することができる。この審級は、自己観察と自己批判のために働き、心的検閲の仕事を行い、われわれの意識には「良心」として知られることになる。(……)

しかしながら、自我・批判にとつて嫌悪すべきそうした内容だけが、ドッペルゲンガーに併合されるわけではない。結局実現されずに終わりはしたが空想が依然として固執したがつている運命形成の可能性、また、外的な都合のせいで貫徹されなかった自我・

追求、そして、自由意志という錯覚を結果的に生みだす抑え込まれた意志決定、それらも同様にすべて、併合されるのである。⁵

自己批判的審級は道徳的な内容のみならず、空想の可能性や追求心なども併合できる。それは一度そうしたものを自我が切り捨てているという事実には他ならない。自我は幼少期の幻想、甘え、癩性などの一切合財を抑圧している。

姉と杏子のケースこそ、まさに自我（「家」）と批判的審級（「家」ならざるもの）の関係に合致している。加えて、精神分析とは主体間のコミュニケーションによって成り立つのであった。自分の奥底に潜む無意識は他人によってしか明らかにならない。姉は杏子に見つめられることによって、潜在的な精神分析に晒されていたと言えるのである。より拡張して言えば、古井作品の家事を見る―見られる関係とは精神分析的な営みなのだ。

「妻隠」は作品そのものが、「家」の外部という抑圧したものに見つけられる有様を描いていた。杏子や「彼」が軀の交わりを他人に見られていると感じるのは、世間的な規範に沿えという現実原則からの促しと言えるだろう。杏子が電車に乗り合わせた中年の値踏みするような目つきに気がつく「彼」は、推測をたくましくした末に精神分析医となるだろう。姉はテールブルーコーティングを見られることで抑圧の過程をありありとさらけ出してしまおうだろう。

⁵ 「不気味なもの」二八―二九頁、傍点筆者

改めて注目すべきなのは、見る―見られる関係がいずれも「家」と結びついているということ、誰もがその下で生まれ育ち、誰もがその真似をするようになる「家事」と結びついているということだ。この派生的に広がっていく人間の営みを抑圧と絡めていけば、フロイトが「トーテムとタブー」などで提示した原父殺しが思い出されてくる。

ダーウィンからは、人類が原初、小さな群族を作って生活している、その群族のそれぞれが比較的年齢の高い男性原人の暴力的支配下にあり、彼はすべての女を独占し、若い男性原人たちが彼の息子たちも含めて鎮圧し、懲罰を加え、あるいは殺害して、排除してしまつた、との仮説を借用した。アトキンソンからは、以上のような記述に続くかたちで、この父権制が、父に抗して団結し、父を圧倒し、これを殺害して皆で喰い尽くしてしまつた息子たちの謀叛によつて終焉に至つた、との仮説を借用した。そして、さらに私は、ロバートソン・スミスのトーテム理論に従つて、父殺害ののち、父のものであつた群族がトーテムズ的兄弟同盟のものになつたと考えた。勝ち誇つた兄弟たちは、実のところ女たちが欲しくて父を打ち殺したのではあるが、互いに平和に生活するために女たちに手を出すのを断念し、族外婚の掟を自分たちに課した。父の権力は打ち砕かれ、家族は母権に沿つて組織化された。しかし、父に対する息子たちの両価的な感情の構えは、その後のさらなる発展の全経過に力を及ぼし続けた。父の代わりに特定の動物がトーテムとして据え

置かれた。この動物は父祖であり、守護霊であるとされ、傷つけたり殺したりしてはならぬものとされたが、しかし年に一度、男性原人たちの共同体構成員全員が饗宴を開くために集まり、ふだんは崇拜されていたトーテム動物は饗宴のなかでずたずたに引き裂かれ、彼ら全員によつて喰い尽くされた。この饗宴への参加を拒むことは、誰であっても許されなかつた。これは父殺害の厳粛な反復だったのであり、この反復とともに社会秩序も道德律も宗教も生まれたのである。⁶⁵

トーテム動物に見られることで男性原人は抑圧した父を思い出すだろう。とはいへ想起の有効性が發揮されるのは、儀式の起源を覚えている間だけだ。起源が忘却されてしまつた時には最早父は必要でなくなり、単にトーテム動物に見られるという意識だけが問題となる。共同体のエゴによつて命を奪う営みを反復すること、自分の手で殺めるといふ「家事」を見られるということ、殺害を見られることで「家」が打ち立てられるという形式こそが重要となつてくるのだ。

「抑圧」をつなぎ目としてフロイトと古井の関連性が明らかになつた今、伝統的な習俗を通して「家」の問題をあぶり出していく作品『聖』が浮かんでくる。

⁶⁵ 「モーセという男と一神教」『フロイト全集』第二十二巻、渡辺哲夫訳、岩波書店、一六五―一六六頁

四 習わしを受け継ぐもの

登山途中に雨に追い立てられ、おまけに足まで痛めてしまった「私」は、休息のために偶然出くわした掘立小屋に入っていく。中に入ってみると地藏像が六体並べ置かれており、小屋の隣にはお堂もあるのどやら有り難がられている場所らしいが、背に腹は代えられないのでひとまず夜をそこで過ごすことにした。目を覚まして外へ出てみると、昨日は見えなかった小さな釣橋に気付き、水場もあるようだ。そして、橋を渡つて喉を潤そうとしていたところを、見ている者がある。

「お祖母さんが見てたんです、二階の機場の窓から。ときたま、窓のところまで這い出してくるんです」

「それで、なにか……」

「ヒジリさまが来た、と騒ぎ出して、聞かないんです。昔と今がもうわからなくなっていて」¹⁹

出くわした村の女、佐枝から、この辺りにはサエモンヒジリという習わしがあるのだと知らされる。村には古来より乞食として小屋に住みついた男が葬儀を請け負うという仕来りがあった。死人が出るたび遺体は棺に入れられて小屋の前に置かれ、乞食によって釣橋の向こ

うの窪地に埋められることとなる。穢れを嫌うからこそそうするのであり、死人の家族は全てを見守るほかない。

乞食は普段はサエモンと呼ばれ、けがらわしい存在として老若男女から忌み嫌われている。しかし死人が出ればヒジリさまと呼ばれ、聖なる存在として崇められる。端的に言えば乞食は村の一切の穢れの宛先、抑圧されたものの滞留する地点なのだ。

乞食は清き存在になつてはならない。過去の乞食にはしっかりと寺を建てたいと言ひ出す者もあつたし、経を読む声が芝居掛かつてくる者もあつたが、彼らの願いが成就されることはなかった。村の者達は乞食を貶め続ける。家人が余命幾許もなくなった時だけに頼る。

そんな風習は、戦後の復興と共に村から消え去りつつあつた。佐枝の祖母のように、サエモンヒジリの存在を覚えていた者だけが信じていることだった。

「焼場は厭だ。鉄の扉がしまつて、中でごうごう音がして、ああ、厭だ。ゆつくり土になりたい。土になつて川に流れるんだよ。ヒジリさまが、あんばいしてくださる」²⁰。

月並みな解釈をすればこの習わしは、土にはしつかりとした骨格を残した遺体という具体的な形見があると意識することで、村人が自らの血筋を忘れないようにするためのものだと言えるだろう。死人に見

つめられることで「家」を守るのである。それが火葬へと移っていくというのは、近代化の進行、血筋の忘却に他ならない。孫娘の佐枝は、他の家族から厭われつつある祖母のために「私」に懇願する。どうかお祖母ちゃんのためにサエモンヒジリのフリをしてほしい、と。¹¹⁰

一度佐枝と軀を交わしてしまった「私」は、ほだされる形で小屋に残ることとなる。以来彼のもとには佐枝から食事が届けられ、酒が届けられ、軀を交え、と言った具合にまるで「家」を作るかのような生活が積み重ねられる。そしてその様子は、小屋から見える家の二階の窓から、佐枝の祖母から見られている。あるいは兄嫁に見られている。無論、この兄嫁はサエモンヒジリのことなど信じていない。気にかけているのは佐枝の事だけである。唐突に現れた乞食のような男と関係を持つていようだが、一体何をしているのだか、祖母の遺産の分け前をどうやりくりしていくのかと相談しているのだか……。

小屋に住みつくようになって何日か経って、飯を食うのも何度目かになって、軀を交えるのも何度目かになって、佐枝が「結婚してくれぬわね」と口走るようになったある日、兄嫁が初めて「私」の下に初めて姿を見せた。

「あの女が探しにきたわ。すぐに表の窓をあけて、何喰わぬ顔で外

¹¹¹ちなみに佐枝も他の家族、兄夫婦から嫌われている。祖母が死んでしまえば家にいることは出来なくなり、村から出ていかざるを得ないゆえにこの懇願は、佐枝が祖母を自らの心の中に刻みつけ、これから生活の支えとするためにも為されるものなのだ。

を見ていて。あたしは来たけどすぐに出て行った、町まで行くって急いでいた、とそう言うのよ。いいわね、何もあずからなかった、と答えるのよ」¹¹²

それにしても何故、行きがけに軀を交えたに過ぎない関係の佐枝が結婚などと言いだすようになったのか。サエモンヒジリは村の女と交わってしまうと追い出されてしまう、というのも習わしの一つだった。乞食は男どもによって叩きだされ、河原に投げ込まれ、石をぶつけられながら村を去っていく。女は小屋に入る時点で狂っているようなものだったから、乞食とは別に、町へ働きに出るか、人買いによって村から離れていくか、だった。中には女を引き連れオート三輪で村を出て行った乞食もある。佐枝はその習わしを意識したに過ぎない（ある程度「私」に対して情を抱きはじめてた所はあるにせよ）。

特に佐枝の祖母自身、乞食と交わったとの疑いをかけられ折檻された過去があつたのだから、孫娘がその血筋を意識するのは不思議ではない。もつとも、乞食と交わったのは祖母ではなく、彼女の友人だった。祖母はあくまで、乞食と友人が軀を交えているのを見ただけだった。このままでは友人が遠くに行ってしまうと思ひ、乞食にあの娘と関わってほしくない懇願に向かっただけだった。しかし、こちらを振り向かない乞食に気圧されて何もできず、小屋から出て行ったところを村の者どもに見られただけだった。疑いは晴れ、代わりに友人の

「罪状」は明らかになり、家族ともども村を離れた。

ところで、ここまで見てきたところで乞食と女が交わることを何故タブーとするかという疑問が浮かび上がってくる。乞食が清き存在になるのを拒む背景には、そうなってしまうては忌むべき概念である死を思い出してしまうという、抑圧されたものの回帰の回避（あるいは否認）が存していた。ならば乞食と村の女が交わってしまうこともまた、村人にとっては抑圧されたものの回帰を意識させるものなのではないか。

では村の子どもが抑圧しているものとは何か。答えだけを先に述べれば、女を犠牲にしたという罪の意識である。乞食は常に居ついているというわけではなく、十五年ほどを目途にいなくなり、次の者がやってくるにも間隔が開くことがあった。その間にも死人は出るのです、村の嫡男以外の若い男を代理として立てなければならず、当然、穢れを押し付けるからにはそれなりの補償は用意しなければいけない。

昔は川渡しの後で、ホトケを出した家に若い嫁がいればその嫁と、いなければ誰か村の若い嫁と一夜、という仕来りがあったそうだが、それは形だけのことで、実際には金で礼を済まし、年の行った青年が町の遊郭へ連れて行く。²³

つまり、乞食のいない時には嫡男以外の若い男と、女を犠牲にする

必要があった。そこまでしなければ穢れは負いきれるものではなかった。これこそ抑圧されたものに他ならない。もし乞食に女を差し出してしまえば、女を犠牲にしなければ穢れを負いきれなかった自分たちの情けなきを想起してしまうから、忌み嫌った末に女ともども村から追い出してしまうのである。

無論、こうした罪の意識は「私」の許にも回帰してくる。形はどうあれ、お前は佐枝からの世話を交換条件にしてサエモンヒジリの役割を引き受けているのだから、その「罪」を忘れるなど言わんばかりに、彼は様々な視線を意識せざるをえない。

目をおそるおそる奥のほうへやると、ちょうど遠い車のライトがお堂の中を斜めに掃き、まず右端の地蔵の顔が浮んで、妙な笑いを目もとにふくませてうつむいたかと思うと、続いて五つの顔が順々に苦笑して目を伏せながら暗がりの中へ紛れた。思わず卑しげに私は頭を下げた。そしてまた土間にしやがみこむと、両手で戸をしやにむに押したが、戸はびくとも動かなかった。黙々と石を積む佐枝の姿を想って、私は精を洩らしそうな焦りに取り憑かれた。²⁴

地蔵はサエモンヒジリからの呪いの現れ、というより、彼の自己批判的審級が投影された姿なのだと言えよう。そして村の習わしから離れ、一個の個人として佐枝と向かい合った時、「私」は女を犠牲にし

たという意識のみならず、独り身の自分も犠牲にしてしまったという意識も感じるようになるのだが、これは続編の『栖』を論じる時に話そう。

ともあれ、こうした村の習俗にまつわるあらゆる事どもを聞かされながら、「私」は出ていくべきか出て行かざるべきかの逡巡を繰り返した末に、結局祖母のために読経する。とはいえ読経など出来るはずもない。それでも叫ばなければならぬ。サエモンヒジリの仮構だけでも実現させるために叫ばなければならぬ。では何を叫ぶかと言えば、自分を叫ばせるもの、祖母のためにここにいてくれと懇願する佐枝のための言葉である。祖母が亡くなって村を出ていき独りで生きていく佐枝のために叫ばなくてはならない。佐枝の心に祖母を刻みつけるため、佐枝を村から絶縁させるため、「私」は佐枝、佐枝エ……とようやく胸の中から言葉を引っ張り出す。

朝を迎えると、佐枝から家に声は届いたと告げられた。後は川向こうに送るための道を整えるために草を刈って、老人に死の準備は出来たと知らせるだけである。一通りの仕事を終えて、「私」は眠りに就いた。するとその夜、先頃から続いた雨のせいで土砂崩れが起きる。土砂は川向こうにある墓場をすっかり呑みこんでしまい、「私」を小屋から佐枝の家へと追い立てた。彼はそこで重く淀んだ湿気の中に、線香の匂いを嗅ぎ分ける。

※それこそ「妻隠」で寿夫がたびたび礼子を他人の目で見つめ、独り身の心境に回帰するように。

足音をころして近づくと、西に回りかけた月の流す濃い陰の中に、黒っぽい服に長靴をはいた男たち女たちが二十人ほど、こちらに背を向けてひと塊りに立ち、何かに見入っていた。喉の奥が涸れたような、ほとんど敬虔な声が聞えた。

「表から先に水を冠るとはな」

「いよいよ、売り払う時が来たか」

「いや、水の出るところは、嫌われる」

「そうでなくても、水気のおおい土地だわ」

「また米を作るよりほかに、ないだろうかね」

振り返ると裏もいつのまにか一面に水に覆われ、ところどころ稲の穂がゆるい流れになびいて揺れていた。水はすでに低くなった河原へ引きはじめていた。

「裏も水が出ました」と私はぼそつと声をかけた。

村人は揃ってこちらを向き、声の主には目も呉れず、どれも同じ、男も女も紛らわしい無表情な顔をして、もう自明のことのように裏の出水を見わたしながら、私のそばをぞろぞろと通り過ぎ、家の裏手にまたひと塊りに集って動かなくなった。※

代理であるとはいえ、最早サエモンヒジリが顧みられることはない。「家」の形成のために乞食を見る必要はないし、乞食に見られる必要

もない。こうして見離された「私」は、村から離れ、東京へと帰っていく。そこでまた、村と絶縁し東京へ出てきて一個の個人となった佐枝と出会うこととなる。⁵⁵

五 栖を壊すもの

続編の『栖』^{すみか}で二人はすぐに出会うわけではない。佐枝は東京に出てくると、ひとまず暮らしの地盤を確かにして、それから「岩崎」と名称を変えた主人公と会おうと決めていた。しかし、間もなく妊娠が明らかになり、墮胎を決心する。佐枝は以前にも子を墮ろしたので、その時に相手が見せた冷淡な態度を思い出し、岩崎と同じような態度を取られたらと危惧した。加えて、子を宿すまでに至ったのは郷里の因習にからめとられたせいだ。最早郷里を捨てたにもかかわらず、そこで起こった事を口実に男にもたれかかるのは佐枝にとって

⁵⁶ ここでの『聖』の分析は、あくまで作中の文章をすべて真に受けた場合のみ妥当性を帯びる、ということをつけ加えておく。精神分析のストーリーを引き写したような習わしは、佐枝が村を離れるための口実として仮構した可能性があるのだ（佐々木中「解説——古井由吉、災厄の後の永遠」『古井由吉自撰作品』第四巻参照）。あえて因習を仮構して自分の支えとする行為は佐枝の気を触れさせるまでに至るのだが、これは次の五章で論じる。

あさましい話だった。

改めて働きに出た佐枝は、岩崎の代わりと言わんばかりに男と関わりを持つようになるが、それがいびり合っている兄に言われたことをなぞるような行動に過ぎないと気付く。

「女は一人でいつまでもふらふらしていると、そのうちに、媚を売って暮す癖が、身に染みついてしまうぞ」⁵⁷

佐枝は一度男から離れて、自立した人間になろうとする。自分一人の生活の習慣を作り出して、自分で稼げるようにもなつて、兄の言うような媚を売る人間にはなるまいと努めた。

部屋へもどると、扉の開く音を耳にして畳の上からゆっくり身を起す腫れぼったい顔が、つかのま見える気がした。隅のほうに屈んで着替えていると、その後ろで電燈の真下に立って胸で息をつきながら身につけたものを落していく姿が、自分自身よりもなまなましく感じられた。立居にしつかり節目をつけるよう佐枝は心がけた。誰かに見られているつもりでふるまった。ひとりで食事をする時、髪をとかす時には、だらけたふうにならぬよう、とくに気をつけた。溜息をつくことも禁じた。溜息をもらすと、とたんに部屋の中が濃くにおい出す。自分の影が部屋いっぱいひろがって、自分を押

⁵⁷ 「栖」『古井由吉自撰作品』第三巻、河出書房新社、十二頁

出そうとする。²⁹

佐枝はこうして「家」を作り出そうとする自分を邪魔する、「家ならざるもの」を封じ込めようとする。郷里に自ら別れを告げて根なし草になった人間は自ら根拠を作らなければならない。それは自分との戦いとなる。根拠を打ち立てるのが自分であれば、根拠を崩しにかかってくるのも自分なのだ。抑圧されたものが沸々と回帰の時を狙うのを感じて、とうとう佐枝は岩崎に電話をかけた。自分の暮らしの根拠を共に担ってくれる、佐枝が根なし草になった原因をよく知っている男を求めた。

とはいえ、佐枝が男に冷淡な態度を取られた過去があるように、岩崎にもまた女を突っ撥ねた過去があった。佐枝がふたたび妊娠し、産むか産むまいか迷っているところに、岩崎の部屋にかつて住みついていた女が現れ、「あたしはこの前流産しちゃった」、「良い子を産んであげてね。あたし、心から祝福します」という言葉を残して去っていく。流産したのは岩崎の子ではない。しかし、自分の愛している男が、かつての女をそうした境遇にまで追いやったという事実は、佐枝の心に焼き付いてしまう。同時に、岩崎は弁解を余儀なくされる。

「どこでこしらえようと、生まれてくる子供には、関係なからう」
「祝福してくれるのは、あの人だけよ」

「産めばいいき。連込みでこしらえた子を、大事に育てる夫婦だつて、ゴマンとあるんだから」

「ろくでなし。小屋に居ろつて言われれば、わけもたずねないで、何日も居る。逃げ出したがつているくせに、産めばいいなんて言う」「ろくでなし」ともう一度つぶやいて、佐枝は黙りこんだ。言われれば言われたとおりの顔つきになっていくのが、岩崎には、われながらたわいなく、また凶たくも思えた。

「ああ……まず飯を食いに行こうや」³⁰

一度女を捨てた上で改めて佐枝と世帯を持つというのは、過去の女に対する罪悪感を押さえつけるとともに、女を捨てる決心をした時の自分をも押さえつけることとなるだろう。あの時お前は女を捨て、気安い生活を求めた、それが妊娠にほだされて家庭を持つとはどういうことだ……抑圧されたものは佐枝と同棲するようになると余計回帰する。かつての女と暮らした部屋から、佐枝の部屋へと栖を変え、子を産んでも逃れられないものとなる。

そもそも子が産まれたところで、父親はそれを自分の子供であると認知するには時間がかかる。単純に父は母と違って自らの腹を痛めて産むわけではないから、目の前にいる小さな赤ん坊を肉体的なつながりをもって眺めることは難しい。それでも親子として自分と小さな赤ん坊を括っているのは、血のつながりという、目には見えない觀念に

等しい科学的な常識、あるいは社会的な常識だけだ。それに従うために、父親はここでも抑圧を働かせる。

念のために言えば、こうした心情は道徳では裁けない。「不気味なもの」の引用でも確認したように、我々はかつて自分の中にあつたものを抑圧して道徳を手に入れるのだった。それでもなお道徳を盾にしようというのならば、そうした姿勢はフロイトの文脈では「ヒステリー」を起こしてしまうだろう。そして、佐枝と岩崎を苦しめていくのもこうした葛藤なのだ。

岩崎は父が子を抱く時に常に表すだろう戸惑いを見せる。

しかし部屋に着くと岩崎は毎夜、おやと首をかしげる気持で、靴を脱ぎながら赤ん坊を眺めやめた。妙なものを拾ってきたものだというような想いが頭を横切った。背広を着たまま岩崎は赤ん坊を抱き取って、さまざまに揺すってみる。見れば見るほど奇怪で、哀れでならなかった。ある晩、佐枝がいつのまにか後ろに来て、ぼそつと声をかけた。

「あなたのあやし方は、表を返し裏を返し、ひねくりまわしてるみたい」³¹

こうした岩崎の様子こそ、これは本当に俺の子か、という戸惑いに他ならない。そこに佐枝は「家ならざるもの」を見出す。

「あなた、この子のことを、疑ってたでしょう」

「まさか……お前、あの頃、ほかの男と寝たのか」

「そんなことをしていたら、あなたと、こうしているもんですか、産みたかったら一人で産みますよ」

「そこまで疑われていると思っていながら、黙って産んだのか」

「母親は、申し開きなどしないものです」³²

母親は申し開きをしない。ただ産まれてくる我が子を受け止め、夫が父親になってくれるのを待つほかない。とはいえ、父親が戸惑いを見せるからには、不安にならざるを得ない。そもそもこの人と家庭を持つてしまったのが間違いだったのではないか、と思わざるを得ない。そんな佐枝の様子を見るように見ないフリをして、岩崎はある日赤ん坊を連れて散歩に出かける。家から出て子と二人きりになる。妻に見つめられない中、同じ屋根の下から一度離れて、お互いの顔を見かわしていると、親子はあたかも他人を見るような目つきを交錯させることとなる。

いつのまにか見覚えのない通りの、バス停のところへ来ていた。ちようど振返ったところへ、バスが姿を認めて車体を寄せてきたので、岩崎はあわててポケットの小銭を探り、乗物にも馴れさせなく

ては、とつぶやいて乗りこんだ。走り出したとたんに、子は両手で縋りつき、窓を飛ぶ光に目を剥いた。それから父親の顔に、責めるような命乞いをするような目を向け、鼻に深い皺を寄せた。いたいけな命の顫えに、岩崎は依怙地な気持になった。生まれて来たからには、怖い目は避けられないと思え、と怒鳴りつけんばかりに通路の真中に突立って、ひと停留所ふた停留所とやり過した。

三つ目でバスを降りて、金もないので来た道を引返しはじめたとき、岩崎は赤ん坊を抱いて車の往来ばかりが賑かな田舎道を歩いている自分が、ようやく奇怪に思えてきた。長い夢から覚めて、栖がよく思出せない、母親もどこの女だか知らぬ、そんな心地さえた。子はまた間近から顔を見つめていた。今度は首がすこしも振れず、目の焦点がこちらの鼻のあたりにびったり合って、考えこんでいるふうに見えた。いくら揺すっても、あやしかけても、目は動かない。ひと気のない雑木林のそばに差しかかり、岩崎は背中にかかるい戦慄の走るのを覚えた。と、子は白眼を剥くようにして岩崎を睨みつけ、顔にみるみる血の気が昇ったかと思うと、全身を硬くしていきみ出した。林を抜けるまでいきみ続け、やがてまるやかな異臭が漂ってきた。³³

帰ってきた二人を迎えた佐枝は、子と対峙して戦慄を覚えた岩崎の様子を敏感に嗅ぎ取る。「この子を、どこへ、やるつもりだったんで

すか。怖い顔して抱いて飛び出して……」。決して妄想とは言えない。三章でも見た通り、精神分析は主体間のコミュニケーションに基づいているのであり、無意識は他人によってしか暴かれなかった。それが一度は愛し合った夫婦という、お互いに「転移」しきつた関係ならば、尚更無意識はたやすく取り出せるだろう。子を自分のものだと思知しかねる父親の中に潜む「家ならざるもの」は簡単に暴き出せるだろう。「だって、あなた、いかにも始末をつけかねたような顔で帰って来るんですもの」。

夫が頼れなくなったからには、最早世間を頼るほかない。世間ではこうしているのだという規範を自分の中に取り込みながら、子供を守っていかなくてはならない。しかし、一度根なし草になった佐枝にとつて、それは困難なことであった。

この子の顔をアパートの住人に覚えてもらわなくてはいけない、だから、近所づきあいを始めようと思う。そう打ち明ける妻を、普段アパートにはいない夫は、それで佇まいが落ち着いてくれるのならいいのではないかと、と暢気に眺めていた。が、段々様子がおかしくなってくる。ひっそり暮らしていることを白い目で見られているのでは、などと言いだす。駅から出てくると珍しく迎えに来て、駅まで迎えに行くくらいの愛情を示せと教えられた気がする、などと言いだす。近所の女房達は心配してくれるから、その心配に応えるように、心細いように振舞わなくてはならない、などと言いだす。これはもうおかしいと見て、岩崎は今更のように佐枝を心配するようになる。勝手に女房

達の気持ちとやらを付度して、勝手に自分なりの暮らし方を押し進めようとするので、岩崎は一人にさせられた気になる。

しかし毎夜、部屋の扉の前に立つと、佐枝も子もいなくなっているのではないか、家具もすっかり消えて空き部屋になっているのではないか、とそんな妄想が頭を掠めた。男の手を逃れて、と自分で合点しそうになるのが奇怪だった。母猫が生まれたばかりの子を喰ってしまう。我身の腹の闇の中へ返してしまう……。³⁴

ある日銭湯に行った時、岩崎は佐枝が銭湯に行くのを嫌がっていたの思い出した。なんでも自分の裸体を周囲の怪訝な目に見られるのが嫌なのだという。佐枝は大丈夫だろうか、そして子もまた大丈夫だろうか……。「家ならざるもの」を見出した岩崎は不安のあまり、佐枝がそうしたように母親と子を「家」に引きもどそうと男湯にあっても女湯の様子を空想する。所詮杞憂に過ぎないと思ひ、その時はひとまず湯から出て、佐枝と子と共に家に帰った。翌日、岩崎は近所の主婦から、佐枝が近所づきあいをしていないと知らされる。

近所づきあいらしいものを、佐枝はまったくしていなかった。立話はおろか、道で出会っても先に目を伏せてしまう。ただ、ときたま暮れ方に赤ん坊を抱いて戸口にぼんやり立ち、通りかかる主婦に

いきなり二言三言訴えるような口調で話しかけ、怪訝な顔をしている相手を置いて、すつと部屋の中へ入ってしまう。言うことがすこし、普通でない、というか、内々すぎる……。

うちの主人は、どう見えますか、ここを自分の家と思ってるんでしょうか、とその主婦にはたずねた。

別の主婦には、主人が何か言ってますませんでしたか、あなたたちなら同類だから本音を話すでしょ、と疑うような目をした。

昨夜は銭湯の前でまた別の主婦に、主人があたしと子供をお湯に置いて、どこかへ逃げ出してしまいました、と訴えていたという……。³⁵

最早佐枝は夫を頼りにすることも出来なければ、余所の真似をすることも出来ない。ただ自分の中で規範を作って、それを頼りにすることしかできない。奇行はますますエスカレートし、ベビーベッドを部屋の真中に置いて「家」の存在を見せつけたり、子に近づこうとする父親に向けて果物ナイフを突き付けたりした挙句、最終的には襖を閉め、棒を鍵代わりにして、岩崎から見られないように自室の整理を始めるようになる。岩崎という「家ならざるもの」から向けられる目を排除して、自室を整理することで「家」を整える行為に他ならない。しかし、そうした男を撥ねつける態度こそ岩崎にとっては「家ならざるもの」なのだ。

佐枝が依怙地になれば、岩崎も依怙地になる。かといって岩崎が放っておくようになれば、佐枝はいよいよ一人での身支度に精を出し、狂気を増幅させてしまうだろう。それを見せられることで岩崎の中に佐枝を見捨ててしまおうか、いや、いやしくも夫なのだから見捨ててはおけないだろう、という葛藤が生まれ、抑圧が生まれる。相手の狂気はこちらの狂気の原因になり、二人は揃って狂態を見せるようになる。

いよいよ一人では手がつけられない事を悟った岩崎は、病院に行くことを決心するものの、佐枝の抵抗に遭い結局またも部屋から閉め出されてしまう。すると向こうから衣類を畳の上にたたきつけるような音が聞こえてくる。扉は開けられるだろう、しかし岩崎は窓から妻の行為を見ようと試みる、部屋は二階にあるにもかかわらず。佐枝に気付かれ悶着している様子を、下の階の男が何事かと見ている。彼が向ける目つきは、「家」が破綻していると決めつける色に満ちているだろう。

ふたたび病院に行くためにタクシーを拾った時、妻は夫を「この人は主人なんかじゃない、悪い男なんです」となじる。夫は反発するあまり「運転手さん、このまま病院へやってください。妻は気が振れてるんだ」と返してしまい、厄介事を嫌った運転手によって降車させられてしまう。その目つきによっても、「家」の破綻は知らされるだろう。

車から降り、疲れ果ててしまった岩崎が公園のベンチに座り込んで

いると、佐枝は見知らぬ男に「このあたりに、頭のおかしくなった者を、直してくれるところはないでしょうか」と道案内を頼む。男は好意的にも二人を病院まで連れて行ってくれたが、それもまた二人が作っていた「家」の破綻を見取ったゆえの優しさだろう。

なんとか医者には見ってもらったが、佐枝はもらった薬を捨ててしまい、いよいよ放心してしまつて家事さえしなくなり、岩崎は子の世話以外の一切を引き受けることとなる。あれだけ妻に子を捨ててしまうのではないかと思われていた男が、今では「家」を守ろうとしている。最早佐枝の固執は岩崎に移ってしまった。

ふたたび薬をもらつても、佐枝はそれを墮胎のための薬だと言い張つて拒む。あるいはからだを弱らせて「家」を崩壊させるものだと受け取る。狂気は様々な形で現れ、ある時には「話をつけてくる」といつて子を連れて夜に家から出て行ってしまう。幸いにも戻つてはきたがこれではまずいと岩崎は会社を一旦休んで佐枝を見張ることにする。それもまた狂気であることは言うまでもない。つぶさに見つめる様子から妻は「家ならざるもの」を嗅ぎ取り、夫に向かって「家ならざるもの」をぶつけ返す。とうとう岩崎は根負けして、佐枝を病院に預ける。

診察室へ呼ばれると、岩崎は佐枝の先に立って医者の前に進み、通院を怠つていたことを詫びて、即刻の入院を願ひ出た。医者顔に困惑が浮んだ。手前の女房を、診察を拒んで勝手に狂わせたあげ

く病院の手にゆだねようとしている。酷いような身勝手さを岩崎は自分の声にも顔にも物腰にも感じたが、いよいよ凶太く落着きはらって願いつづけた。³⁶

佐枝は閉鎖病棟に送られる。岩崎によって、病院に「片づけ」られてしまう。それを子が見ている。

赤ん坊が、いつ目を覚ましたのか、間近からこちらを見つめていた。大きく見ひらいた目の、瞳を内へ寄せ、鼻の根もとに力を集め、ひどく真剣な顔にやがて赤みが差して、両の拳を握りしめ、低く長くいきみはじめた。腹のあたりで触れあう温みから、まるやかな異臭が昇って荒打ちの壁のにおいのなかへひろがった。

「お佐知さんよ。お前さん、おふくろさんがいなくなったらさつそく、やってくれたな」

たわいもなく、岩崎はそちらへ気を奪われた。³⁷

続編の『親』で佐枝は退院する。『栖』でも何度か姿を見せていた岩崎の母が亡くなり、夫婦はたとえ都会で生活を営んでいても、まがりなりにも血のつながりは残っているのだと確かめる。佐枝は自らの郷里を訪れることを決心し、血族との間のわだかまりに決着をつける。

³⁶ 「栖」一七七頁

³⁷ 「栖」一七八頁

「ああ、疲れた、すっかり片づきました、あの親にも会ってきた」³⁸。しかし、全てが片づいたわけではない。たとえ佐枝の病が落ち着きを見せたところで、それは抑圧が上手くいつているだけの話だし、親とのつながりを自分にとって良いように解決したところで、目の前の同棲相手との対峙は避けられない。「家」、そして「家ならざるもの」はこれからも二人が目を見かわすたびに現れるだろう。二人が死んでも、子が受け継ぐだろう。そうして「家ならざるもの」は、我々が「家」を作るたびに生まれて、我々を脅かしにかかってくるだろう。

「まあ好かった。あの人だけはこれで片が付いて」

細君は安心したと云わぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたって」

「でも、ああして証文を取って置けば、それで大丈夫でしょう。もう来る事も出来ないし、来たって構い付けなければそれ迄じやありませんか」

「そりゃ今迄だって同じ事だよ。そうしようと思えば何時でも出来たんだから」

「だけど、ああして書いたものをこっちの手に入れて置くと大変違えますわ」

³⁸ しかし、佐枝の両親は亡くなっている。兄夫婦は「親」ではない。これもまた、註27で言ったように仮構の可能性がある。またも佐枝は、抑圧を行っているかもしれないのだ（佐々木中「解説——古井由吉、災厄の後の永遠」参照）。

「安心するかね」

「ええ安心よ。すっかり片付いちやったんですもの」

「まだなかなか片付きやしないよ」

「どうして」

「片付いたのは上部だけじゃないか。だから御前は形式張った女だと云うんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「じゃどうすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起った事は何時迄も続くのさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ」

健三の口調は吐き出すように苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を抱き上げた。

「おお好い子だ好い子だ。御父さまの仰やる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君はこう云い云い、幾度か赤い頬に接吻した。⊗

〈了〉

参考文献

古井由吉「杏子」「妻隠」「聖」『古井由吉自撰作品』第一巻、河出書房新社、二〇一二年

〃 「栖」『古井由吉自撰作品』第三巻、河出書房新社、二〇一二年

古井由吉、佐々木中「親」『解説——古井由吉、災厄の後の永遠』『古井由吉自撰作品』第四巻、河出書房新社、二〇一二年

坂口安吾「日本文化私観」『定本坂口安吾全集』第七巻、冬樹社、一九六七年

夏目漱石「道草」『漱石全集』第六巻、岩波書店、一九六六年
フロイト「トーテムとタブー」『フロイト全集』第十二巻、門脇健

訳、岩波書店、二〇〇九年、
〃 「不気味なもの」『フロイト全集』第十七巻、藤野寛訳、

岩波書店、二〇〇六年
〃 「モーセという男と一神教」『フロイト全集』第二二巻、

渡辺哲夫訳、岩波書店、二〇〇七年